7言語の情報誌

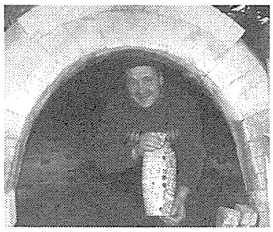
みみタロウ

日本語版　　８１号　２０１０年４月

滋賀県国際協会ボランティアグループ「みみタロウ」
大津市におの浜１－１－２０　ピアザ淡海2F
Tel/Fax：077－523－5646
E-mail：mimitaro@s-i-a.or.jp
URL：http://www.s-i-a.or.jp

信楽の土に魅せられて

滋賀県には日本六窯の一つに数えられる信楽焼があります。今回みみタロウは、信楽焼の陶芸作家、ガーリー・モーラさんを水口にあるご自分で建てられたお家に訪ね、お話をうかがいました。



まだアメリカの大学の学生だった頃から日本の陶芸や建築に興味があり、貴生川に下宿して信楽焼に親しんだ経験もあります。卒業後、建築会社で働いていましたが、東京でコピーライターの職に応募して再来日。陶芸への関心は衰えず、空いた時間に博物館や窯元に通いました。その後辻清明という陶芸作家に出会い、いろいろ教えてもらい、陶芸の世界にますます惹かれていきました。そして東京に住み始めて３年後、東京を離れ、自然の豊かな信楽で作陶生活に入ることに。信楽焼の自然にまかせる考え方、自然と共に生活する哲学的な考え方が好きでした。自然界と宇宙界とそして人間がその調和の内に一つの物を作るという考え方です。信楽焼は色を塗りません。炎の暖かさで赤みを出します。１週間、１２５０度～１３５０度の窯の中で溶け出す灰が醸し出す味わいが全てです。それは時間をかけて自然にできるものですが、人間がかかわらないとできないものでもあるのです。人間が自然に対し謙虚な立場で自然とともに一つのことを作りあげていく、この共同作業はつきることはありません。かつて琵琶湖の底だった信楽には粘土質の良い土があります。その土を使って造形し、窯で焼くのですが、その時の天候、材料、新など全てに左右され、一つとして同じものは生まれません。そして、５０個、１００個と作ってやっと一ついいものができあがります。こうしてじっくりと作り上げた物は、何十年、良い物なら何千年経ってもあきることのない物になります。作品には、自分の哲学や宇宙観を投影します。自分の哲学を込めた作品が人々の食卓を彩り、人が集って語らう豊かな空間を生み出すきっかけになれば何よりの喜びです。それこそが、本当のごちそうで、文化だと思うのです。

日本には古い伝統文化があり、その中で陶芸ができることは素晴らしいことです。建築にしろ陶芸にしろ何千年も前からの多くの蓄積があり、それを参考にして良い物を作りだすことができるからです。例えばコンクリートは５０年でだめになりますが、宇治の平等院は千年前に建立されたものです。私達はそれを見れば、千年経ったら木材はどうなるのか、いつ伐採した木を用いたのか、地震に持ちこたえたのは何故なのか、いろんなことを学ぶことができます。使い捨ての文化からは何も生まれませんが、豊かな文化の経験には更に様々な新しいものを生み出す力があるのです。

自然に囲まれたこの山中に暮らし始めて３０年。静かな環境の中で陶芸を作り、時には家でジャズコンサートや窯焼きピザパーティーを催して人々との集いを楽しむこともあります。とはいえ、現実的な日常生活ももちろんあって、田んぼ路や水路の整備、いのしし防御線張りなど、集落の自治活動にも参加しています。そして全ての親がそうであるように、子育てについては随分悩みもしました。私の場合、世界のどこでも活躍できる子どもに育てたいと願い、子どもたちを日本の公立学校に通学させ、家では英語で二重教育をしました。日本の公立学校には良い面が沢山あるのでうまく利用すればいいと思いますよ。子どもは、周りの子どもたちと一緒に学んだり遊んだりして友達になって、周りにうまく溶け込むことが大きな幸せです。そして、どこに住んでいても人は一人前としての扱いを受け、そのように生きるよう頑張ることが大切。親の事情で帰国するかもしれないとしても、親も学校も「どうせ帰国するから」と子どもの今を軽視するのでなく、今居るここで子どもが一人前になるよう教育すべきだと思うのです。でないと、子どもはここに居る間自分が存在しないような感覚を持つのではないでしょうか。そうして子どもが周りに溶け込み幸せであれば、それが親にとっても一番の喜びですね。

神戸には何世代も日本語を話さないままに暮らす外国人がいると知り、なんだか地面から浮いて生活している宇宙人のようで、とても不思議に思いました。みなさんいろいろ大変だと思いますが、親も子どもも一人の人間としてしっかり地に足をつけて生きていくよう、お互い頑張っていきましょう！